昭和二十九年八月二十五日　初版印刷
昭和二十九年八月三十日　初版發行

昭和文學全集43
高濱虛子
釋迢空
日夏耿之介集

著作者　高濱虛子
釋迢空
日夏耿之介

發行者　角川源義

印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話九段〇一二一〇一一四

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
印刷所　曉印刷株式會社
製本所　鈴木製本所

Printed in Japan

釋　迢空
昭和二十五年秋（六十四歳）
大井出石町自宅にて

高濱虛子
昭和二十八年秋（七十九歳）
自宅書齋にて

日夏耿之介
昭和二十九年一月（六十五歳）
自宅にて

高濱虛子
釋迢空 日夏耿之介 集

昭和文學全集

角川書店版

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

卷頭寫眞　高濱虛子　釋迢空　日夏耿之介

高濱虛子集

筆蹟

喜壽艶　九

小諸百句　一四

小諸雜記　一六

俳諧師　二〇

虹　二二

虹　二二

愛居　二五

音樂は尙ほ續きをり　二七

小說は尙ほ續きをり　二九

俳句讀本　一〇四

一　俳句論　一〇四

二　花鳥諷詠詩　一一三

三　俳句作法　一一六

自句自解　一一八

「淺草寺のくさ〳〵」　一二九

寫生文の開拓　一二九

寫生文と小說　一三一

事實を僞らずに　一三〇

極樂の文學　一三一

解說　一三四

年譜　高野素十

釋迢空集

筆蹟　一四九

春のことぶれ　一四九

春のことぶれ　一四九

東京詠物集　一四九

大阪詠物集　一五三

門中瑣事　一五五

古代感愛集　一五九

乞丐相　一五九

伊平屋の村　一六〇

夏日感傷　四章　一六一

はつくさ　一六一

松風の村　一六二

かぞへうた　一六二

雄勝の山　一六三

飛鳥の村　一六三

月しろの旗　一六三

近代悲傷集

北京のわかれ　一七七

獨逸には　生れざりしも　一七七

なつぐさ　一七八

葬　一七八

陸羽西線　一七八

やまと戀　一七九

ゆき　一七九

斷雲　一八〇

笹子の彼方　一八〇

あすたぼぼの夢　一八〇

筑紫の奧　一八一

掬兒　一八二

白　一八三

もの忘れ　一八三

冬くさ　一八四

餘日　一八四

あきくさ　一八五

半日　一八六

天つ戀　一八六

愉悅　一八六

きずつけずあれ　一八七

死者の書　一八八

女流短歌史　二三九

古代の女性　二三九

文學以前　二三九

短歌文學の時代　二三〇
實用の女歌　二三一
萬葉女流歌人　二三三
かけあひの歌　二三三
相聞歌　二三四
文學のない歌　二三五
獨立性を持つた歌　二三七
文學に牽かれた生活態度　二四〇
女性と敍景文學と　二四三
女流文學の單純化　二四三
短歌の本質の成立を見せた歌　二四五
本格的な敍景歌　二四六
女流歌人の居なかつた時代　二四七
短詩形文學の革新　二四八
登美子・晶子の歌　二五〇
歌の圓寂する時　二五四
解說　佐藤春夫　二六三
年譜　二六七

日夏耿之介集

筆蹟　二七五
詩集　二七五
咒文　二七五
薄志弱行の歌　二七五
塵　二七六
黃眠帖　二七七
夜のこころ　二七七
慾界　二七八
一枚の黃色い紙の上に　二七九
寂かなるこの黃昏　二八〇
黑衣聖母　二八〇
青面美童　二八〇
悲哀　二八一
しかし笛の音はない夜の事　二八二
雪の上の聖母像　二八三
黑衣聖母　二八三
儂が身の夜半　二八四
薄暮の旅人　二八四
儂が病院　二八四
書齋に於ける詩人　二八五
古ながらの鶯　二八五
葬列　二八六
轉身の頌　二八六
宗教　二八六
雙手は神の聖膝の上に　二八七
默禱　二八七
悲哀　二八七
訪問　二八七
古風な月　二八七
悲劇役者の春の夜　二八八
痴情小曲　二八八
日本象徵詩史略　二八九
鷗外文學抄　二〇三
鷗外その日本的造立　二〇三
鷗外の日本的思想型態　二一一
青年心理の探求　二一一
永遠の雅文小說　二一九
鷗外の詩　二二五
鷗外その作品その人物の輪廓　二四一
幸田露伴評傳　二四八
荷風文學抄　二五〇
谷崎文學抄　二六一
谷崎文學の民族的性格　二六一
荷風の影響と谷崎文學の出發と　二七一
『蓼喰ふ蟲』を讀む　二八四
『亂菊物語』を讀む　二八六
『春琴抄』とその對蹠文學と　二八八
短歌　二九一
溝五位句箋　二九一
解說　齋藤磯雄　二九三
年譜　二九七

高濱虛子集

[illegible]

所思を認め

了したる

[illegible]

喜壽艶

序にかへて

阿蘇の乙女に送る歌

火の國の火の山裾の乙女子が
泣きしと聞きぬ我心いたむ

やり羽子や油のやうな京言葉

京女がやり羽子をしてゐる。それ等の口からは、油のやうに滑らかな京言葉が流れ出る。

つく羽子の靜かに高し誰やらん

板塀の向うに羽子をついて居る。いつもは大勢が追羽子などをして賑やかなのであるが、今日は只一人しづかに高々と羽子をついてゐるものがある。誰であらう。その人を偲ぶ。

手毬唄かなしきことをうつくしく

昔の人の悲しい情事が唄になつてゐる。悲しい事柄ではあるけれども、それが手毬唄になつて、美しく歌はれてゐる。

歌留多とる皆美しく負けまじく

皆美しい女である。どれも負けさせたくない。

座を擧げて戀ほのめくや歌かるた

若い男女が入り混つて歌留多をとつて居る。誰と組むのが好きだとか嫌ひだとか、歌留多のときはそんなことも咎められずに。一座には戀の氣分が漂つてをる。

禮受けの人恥しや筒井筒

「筒井筒振分髪も肩過ぎぬ」といふやうな幼馴染の女も段々大きくなつて來て今は人妻となつた。その家も知合ひで男が年始に行く。玄關に現はれたのは、昔の遊び友達としてゞはなくその家の主婦としてゞあつた。

春着の妓右の袂に左の手

春着の妓が席に侍した。そのときの寫生。

もとよりも戀は曲者の懸想文

昔は梅の枝に文を吊るし艷書に擬して賣り歩るく。其を懸想文賣といふ。松の内に行はれ、其を買うて鏡臺、鐘筒等に保存すると福があるといふ。「花月」といふ謠に「こしかたより、今の世までも、絕せぬものは、戀といへるくせ物、實にこひはくせもの、くせ物かな」といふ小歌がある。

梳きぞめや眦をつと引きゆがめ

梳櫛で右の鬢の毛を梳く時分には右の眦が少し釣り上るやうになる。又左の鬢を梳く時分には左の眦が釣り上るやうになる。

初島田結ひてすね居る書齋かな

お正月になつた。もう娘盛りになつたので島田に結はせた。何に拗ねたのか、その島田に結つたままで自分の書齋に閉ぢ籠つて拗ねてゐる。

春寒のよりそひ行けば人目ある

春寒の時候、男女二人が互により添うて行き度いのであるが、人目といふものがあるので、さうも行かない。

紅梅の莟は固し不言

紅梅の莟が固い。恰も女の口を開かぬやうに。

鶯や文字も知らずに歌心

鶯が鳴いて居る。無學の女ではあるが、その聲を聞いてをると、何となく歌心が動いた。

美しき人や蠶飼の玉襷

美しい人が美しい襷をかけて蠶飼をして居る。

垣間見る好色者に草芳しき

昔男を偲ばせるやうな好色者が、女の家の垣の外に立つてその透間から中を覗いて居る。足許には匂やかな春草が生えて居る。

椿子と名づけて側に侍らしめ

山田德兵衞君が人形を贈つてくれた。人形專門家の德兵衞君のことであるから古い人形でも贈つてくれたのかと開けて見たら、それは今樣の十二三の女の子の人形であつた。私はこれに椿子といふ名前をつけて側におくことにした。

小唄

女人形を　おそばにおいて
明け暮れ眺めしやんすが　氣がゝりな
わしや人形に　恪氣する

京女花に狂はぬ罪深し

何故お前達京の女は、この櫻に對して物狂はしくならないのか。私は今この咲き亂れてゐる花に對して何だか氣が變になつて來た。私がさうであるのに何故お前達は物狂ひにならないのか。このとりすました罪深い京女め。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

園の戸に花見車の忍びよる

これは平安朝時代のことであらうか。花見車に乗つて花にあこがれ歩く殿上人が或女の家の花を見たいと思ふのであるが、其實女を見たいと思ふのかもしれないが、女は堅く戸を鎖して内に入れない。男を乘せた車は其家の戸の外に忍び寄る。

二代目の女あるじや花の宿

京の嵐山の或茶屋は以前行つた時分は姉妹の姉の方が專ら主人として働いてゐたやうであつた。それから何年か經つて又そこへ行つた時には、今度はその妹が主人として專ら働いてゐた。

海女とても陸こそよけれ桃の花

深海に潜る海女は殼にとりついてしばし苦しい呼吸をする。海女といへば海に潜るのが仕事であるとはいへ、それは生死をかけての作業である。それが陸にあがると、唯の若い女となつて嬉々として談笑してゐる。その陸には桃の花が咲いてゐる。

桃咲くや足なげ出して針仕事

小諸に居る時分に蛇堀川を越えてその向うの村落を散歩してゐると、或る家に若い女が足を投げ出して針仕事をして居つた。その庭には桃の花が咲いてゐた。

木瓜咲いて藥いやがる女かな

木瓜が咲いて春も闌になつて來て、病勝ちの女は又病を訴へるやうになつた。醫者に見てもらつて藥を呑めと男はいふが女はいやだと云ふ。

美しき眉をひそめて朝寢かな

女が春眠を貪つて、朝寢をして居る。何か夢でも見たのであらう、ふと眉をひそめた。

夫婦あらそひつゝ行く道や豆の花

夫婦が何か喧嘩をしながら野道を歩いてゐる。何の爭ひであらうか。豆の花の咲いてゐる野道。

ほろ〳〵と泣き合ふ尼や山葵漬

尼が二人向き合つて山葵漬を食べて居る。山葵が辛いので二人の尼は泣いてゐる。泣きながら尙食べてゐる。

上京の花菜漬屋に嫁入し

京には菜花漬といふ漬物がある。菜の花を鹽漬にしたものであつて京でなければならぬやさしい感じのする漬物である。或る一人の娘があつて、上京にあるその菜花漬屋に嫁入をした。

春雨の衣桁に重し戀衣

「戀の重荷」といふ謠曲がある。戀する者はそれだけ重荷を背負ふことになる。自分の力では運ぶことの出來ない程の重荷を背負ふことになる。衣桁には戀衣がかゝつて居る。重い戀衣がかゝつて居る。雨が降つてをる時には一層重いやうな心持がするその戀衣がかゝつて居る。

女よし男なほよし朧月

朧月夜には女は美しい、男は女よりも美しい。

朧夜の伊達にともしぬ小提灯

櫻の眞盛りの或夜のことであつた。或女が手に小提灯を點して先きに立つた。かなり明るいのに提灯をともしてをる。

フランスの女美し木の芽また

いひ忘れてをつたが、一條のかなり大きな川について我が汽車は走つてをるのであつた。それはローヌ河である。佛蘭西は中央の高地から南に流るるものがローヌ河となり、北に流るゝものがセーヌ河となるのださうだ。其ローヌ河に沿うて我汽車は非常な急速度で走りつゝあるのであるが、私の尤も美しいと驚嘆したのは其ローヌ河のほとりにある雜木林の木の芽である。日本にも白い木の芽はありはするが、此ローヌ河の木の芽はビロードのやうに柔かく、銀のやうに光り輝いてゐた。

（渡佛日記の一節）

鞦韆に抱きのせて沓に接吻す

昔は鞦韆といふやうなものも大宮人の間に行はれてゐたらうかと想像して作つた句である。女を鞦韆に抱き乘せてその沓に接吻した。

初雷や耳を蔽ふ文使

春になつて初て鳴る雷。折ふし文箱を持つて來た女の童は、こはいと言つて耳を蔽うた。

家持の妻戀舟か春の海

大伴家持は天平年間越中守に任ぜられた。當時能登は越中と併せてその統治下にあつた。その時分の歌に

妹に逢はず久しくなりぬ饒石河
潭き瀨ごとにみなうらはへてな

能登七尾灣頭に佇むと、能登島を塾へた物淋しい灣の中に、唯一隻の船の浮んでゐるのが目にとまつた。

藤の茶屋女房ほめ〳〵馬士つどふ

峠茶屋か鷄茶屋か或は街道筋の場末にある茶屋か、そこに氣の利いた美しいかみさんがゐる。馬士どもはあそこのおかみさんは愛嬌がある、氣がきいてゐる、美しい、と褒めて自然にそこに集つ

て、茶を呑んだり飯を食つたり酒を呑んだりして繁昌して居る。藤の花の咲く時候のいゝ頃は殊に。

お小姓に惚れたはれたや白重（しらがさね）

卯月一日の更衣は、卯の花の如く白い下小袖に更へる、是を白重といふ。と歳時記にある。その白重を着た御殿女中が、或お小姓に、やれ惚れたのはれたのと騒いでゐる。

セルを著て夫婦離れて椅子に在り

うつくしい家庭。夫婦別ありといふ感じ。

夏めくや化粧（けはひ）うち榮え襞（おもひもの）

妾は男の愛をつなぐためにたゞ化粧をすることを勤めとして居る。殊にそれが夏めいた時候になつて來ると、われながら美しくなつたやうな氣持がして念を入れて化粧をする。

田植女の赤きたすきに一寸惚れた

早乙女の紺の飛白（かすり）に赤い襷をして居るのは風情のあるものである。

飛驒の生れ名はとうといふほとゝぎす

たしか時事新報の依頼であつたと思ふが、上高地に行つた事があつた。そのとき飯の給仕に來た、色の黒い愛嬌のない少女に、お前の名は何といふかと訊くと、とうと云ふと答へた。珍らしい名だと思つて聞き返したが、とうと再び答へた。何處の生れかと訊くと、飛驒だと云つた。この上高地では晝も夜も時鳥が鳴いてゐた。

二三日滯在して歸る時分に一人の山男が荷物を持つて麓まで行く事になつたが、このとうといふ少女も途中まで送つて來た。梓川の清流に沿うて行くうちに或る大きな岩の所まで來た。向うには燒岳が煙を吐いてゐるところであつた。その燒岳の麓を通つて飛驒の方から來たといふ話をとうがした。私はその邊からとうにかへることをすゝめた。とうはそこに立ち止つてしばらく私を見送つてゐた。私は夏帽を手に取つて振つた。とうは手を振つてこれに答へた。

火の山の裾に夏帽振る別れ

薔薇呉れて聖書貸したる女かな

ふとした事で或女と口をきくやうなことになつた。その女は或とき薔薇を剪つてくれた。そしてこれを讀んで見よと云つて聖書を貸してくれた。さういふ女。

麥笛や四十の戀の合圖吹く

男は四十代になつてゐる分別盛りである。それが戀にさまようて女に合圖の麥笛を吹いた。

紅さして寢冷の顔をつくろひぬ

女は寢冷をしたやうで鏡に向つても氣分が引立たない。唇の色も冴えない。やがて紅をさしなどしてその顔をつくろつて見た。

よき娘祭屛風の前にかな

祇園祭の神輿の渡御のある町では店を開け放して金屛を立て列ねてゐる。或美しい娘がその屛風の前にゐた。

山川にひとり髮洗ふ神ぞ知る

誰も人の見てゐない山川に女は肌を脱いで髮を洗つて居る。人は誰も見てゐない。見て居るのは神ばかり。

此句を短册に書いてくれといつたのは今は亡き三國の愛子であつた。愛居と名づけて遣つた其居間の柱に、今もなほ此の短册がかゝつてゐる筈である。

闇なれば衣まとふ間の裸かな

湯上りか或は汗の衣を脱ぎ捨てたときか、灯のともつてゐない眞暗な部屋に女は、一絲も纏はぬ裸のまゝでぢつとして居る。

コレラ怖ぢて綺麗に住める女かな

神經質な綺麗ずきの女。

行水の女に惚れる鴉かな

所へ花道から俳人高濱虚子がステッキを持つて（中略）夫で虚子が花道を行き切つて愈本舞臺に懸つた時、不圖句案の眼を上げて前面を見ると、大きな柳があつて、柳の影で白い女が湯を浴びて居る、はつと思つて上を見ると、長い柳の枝に鳥が一羽とまつて女の行水を見下ろして居る、そこで虚子先生大に俳味に感動したといふ思ひ入れが五十秒ばかりあつて、行水の女に惚れる鳥かなと大きな聲で一句朗吟するのを合圖に、拍子木を入れて幕を引く。（漱石の「吾輩は猫である」の一節）

どかと解く夏帶に句を書けとこそ

鎌倉のもと本覺寺の境内であつたところに小町園といふ料理屋があつた。或時鎌倉能樂會のくづれがそこに行つて杯を上げた。女中頭であつた――名は忘れたが――女が少し醉つて、自分の締めてゐる夏帶を解いて、重たいものを投げ出すやうにそこにおいて、それに句を書けと云つたことがあつた。

那智の瀧の流の末の美人茶屋

那智の瀧は美しい瀧であるが、其流の末に美人茶屋と呼ばれる茶屋がある。そこは美しい娘がゐたところから里人がさう呼び慣らはしたものであつて、今尙その名が殘つて居る。

桃葉湯丁稚つれたる御寮人

桃の葉を入れた風呂、汗疹にきく。大阪あたりの大きな商賈人の内儀は丁稚をつれてその桃葉湯に入りに行く。湯に入りに行くのにも大家の内儀であるといふ物々しさがある。想像である。實際はどうか。

虹立ちて忽ち君のあるごとし
虹消えて忽ち君のなきごとし

其後私は小諸に居て、淺間の山かけて素晴らしい虹が立つたのを見たことがあつた。私は愛子に葉書を書いた。

其には俳句を三つ認めた。

淺間かけて虹のたちたる君知るや
虹たちて忽ち君の在る如し
虹消えて忽ち君の無き如し

（「虹」の一節）

二句は切り離し難きもの、假りに一句と見做して並記した。

戀はものゝ男甚平女紺しぼり

今はせつせと働いてゐる夫婦。

戀といふものは何んなものか、それは男は袖無しの甚平を著、女は紺浴衣を著て居る、そんなやうなもの。

酌婦來る灯取蟲より汚きが

手賀沼のほとりであつたか、其沼のほとりの小料理屋に上つて友と小酌したことがある。酌婦といふものが一人現はれた。その酌婦は美しくない酌婦であつた。沼から飛んで來る灯取蟲は際限もなく杯盤の上に落ちた。その汚い灯取蟲。その汚い酌婦。あはれがあつた。

汝にやる十二單衣といふ草を

宇奈月の延對寺といふ旅館に泊つて、翌朝一行廿人ばかりは黒部鐵道に乘つた。美しい婢が一人宿から隨いて來て何かと世話をやいた。黒部に降りて鐘釣温泉のほとりに行くとそこに鷺草のやうな可憐な草花が咲いてゐた。それは十二單衣といふ草であると案内する人が云つた。私はその一本を摘んで、あなたに上げようと云つてその婢に渡した。

秋袷身を引締めて稽古事

或女が今までも怠けるといふではなかつたけれど暑さにかまけて居つたのが、袷を着る頃になつて、身の引締まるやうな心持がして、稽古事に身を入れるやうになつた。

稻妻をふみて跣足の女かな

稻妻がひつきりなしにしてゐる。何かたゞならぬ跣足の女が一人歩いて居る。その跣足は稻妻の上を踏んで。

松蟲に戀しき人の書齋かな

男は書齋に閉ぢ籠つたまゝ勉强をして居る。女はその書齋に這入ることも出來ないでゐる。庭には松蟲が鳴いて居る。

命かけて芋蟲憎む女かな

芋蟲のきらひな女。芋蟲のことをいうただけでも消え入りさうになる女。

秋風やとある女の或運命

唄

木賀の宿りに落合ひて
しみじみと聞くほとゝぎす
色の戀のといふよりも
人の運命をつくづくと

庭に露けき萩桔梗
空にまたゝく明星に
遇れて昇る山の月

屋根裏の窓の女や秋の雨

屋根裏の一室にゐる或種類の女。その女がぼんやりと窓によつて秋雨の外面を見てゐる。

寄席きゝに走馬燈を消してゆく

今迄は走馬燈の灯影に夫婦は居たのであるがこれから寄席をきゝに行かうといふので、その走馬燈を消して出掛けて行く。そんな夫婦。

枝豆や舞妓の顏に月上る

明るい月が東山のいたゞきに現はれたと思ふとぐんぐんと上つて行く。舞妓の白い顏が浮き上る。京の木屋町。

其人を戀ひつゝ行けば野菊濃し

ある人を戀ひながら野道を歩いてゐると、道端に咲いてゐる濃い野菊が目に映る。その戀うてゐる女もこの紫の野菊のやうな感じのする女である。

蔓もどき情はもつれ易きかな

智照尼は云ふのであつた。「句日記で、蔓もどき情はもつれやすきかな、といふお句を拜見致しました。……情はもつれやすきかな、つて、……ほんたうに、知つていらつしやるお言葉だと思ひました。」低い、ひかへめな、聲で智照尼はさういつて、

「……やつぱり虚子先生のやうな方でなければ……」

といふやうに言葉をにごして、それから笑つた。

（京極杞陽の「智照尼」といふ文章の一節）

妹が戸に流るゝ露やしまりたる

夜が更けて男は女の家に來た。戸は固く鎖されて物靜かに寢てゐるやうだ。露の深い夜で其露が其戸に流れてゐる。

君と我うそにほればや秋の暮

「貴方御夫婦になるのが怖いの。卑怯な人。」とさゆすむやうに言つて「たつた二十分間、貴方は旦那樣で私が女房といふやうな心持でゐるといふ事に貴方は趣味は無いの。」

「浮氣な旦那を出して遣つたあとの物思ひよ。」

「人と契るならうすく契りて末をば遂ゆよ、紅葉葉を見よ、うすいがちるか濃いがまづちるものと知れ、さうぢやわいな。そんなのはいや。」

「君と寢ようか、五千石とろか。もいや。」

「露は尾花と寢たといふ、尾花は露と寢ぬといふ、あれ寢たといふ寢ぬといふ、尾花が穗に出てあらはれた。馬鹿な尾花ね。」（お筆の一節）

妾より美しき妻冬支度

かういふ事はよく世上にある。何であんな見苦しい女を妾にしたのかといふやうな。それに反して美しい妻。それはせつせと冬支度をしてゐる。

うらむ氣は更にあらずよ冷たき手

男は無情な仕打をするが女は少しもそれを恨む氣はない。男に任せた手は冷い手をして居る。さういふ女。

燒藷がこぼれて田舍源氏かな

炬燵の上で田舍源氏を開きながら燒藷を食べてゐる女。光氏とか紫とかの極彩色の繪の上にこぼれた燒藷。

眉目よけん大根洗ひの顏上げず

大根を洗つてゐる若い女、それは美人らしく思はれてしばらく眺めてゐたが、なかなか顏をあげない。

榾火焚きくるゝ女はかはりをり

夢中で得た句の一つである。

前の女は私のために榾を焚いてくれて居つた。一寸目をつむつて、開けて見ると、やはり同じやうに榾を焚いてくれて居る女があるが、それは前の女とは變つて居た。

夢中に得た句は大概つまらぬ句で書き留めておく値打もないものであるがこの句は書き留めて置いた。

死ぬること風邪を引いてもいふ女

風邪を引いても、もう今度は死ぬるかも知れぬといふ。そんな女。

毛衣を脫げば眞肌のあらはなり

ハルビン所見。

八ッ口に懷手して女かな

常に八ツ口に兩手を突込んでゐる女。さういふ女。

狐火の出てゐる宿の女かな

外には狐火が出てゐる。自分の泊つた宿の女は眞逆狐ではあるまい。

假りにきる女の羽織玉子酒

女の許に行つてゐる晩、寒いから玉子酒でもしようといふことになつた。又女はこれでも着ていらつしやいと云つて後ろからその女の羽織をかけてくれた。

妹がりの誰に挿したる柊か

女の家へ行つて見た。節分で柊が挿してあつた。その柊は鬼を入れないために挿した柊であらうが、さて鬼とは誰か。

跋にかへて

有明月

今朝も亦起き出て著物を著かへるとステッキを持つてすぐ散歩に出た。裏戸を出ると西の空に有明の月が鏡のやうに明るく懸つてゐた。昨夜は十五夜であつたが、それが東雲の薄明りの空に、圓盤のやうに明るい有明月として殘つてゐた。

此頃は毎日のやうに海岸を散歩するので、海岸に出るまでの道で出會ふ人は大概きまつてゐる。ガタ〳〵ガタ〳〵音をさせて來る自轉車の牛乳配達などもその一つである。開襟シャツにズボンだけを穿いて、手に鞄を提げてゐる勤人らしい人にも二三出會ふのであつた。が、その中で十六七ばかりの娘が、私が海岸近くに歩を運んだ時分に、必ず向うから來るのにもよく出會つた。

其の娘は海の方から現れて來るのであつたが、私に一向頓著なしに通り過ぎるのであつ

た。

始めの時分はさうであつたが、段々度重なるにつれて、私の方に近づく時には、わざと他所見をしたり俯向いたりして、多少私といふものを意識しはじめてゐるらしかつた。

或る朝のことであつた。ふと二人の顔が出會つたはずみに私の方から口を利いて、

「よく出會ひますね」

娘は一寸笑顔を作つて、

「お早うございます。」

さう云つて別に足を留めるでもなくすたすたと行き過ぎた。

それから四五日の間は行き逢ふ度に先方の方から先に、

「お早うございます。」

と挨拶した。こちらも、

「お早う。」

と挨拶をした。

此の娘が何處から來るものか分らなかつた。兎に角、海の方からやつて來るのであつた。其の後も相變らず、

「お早うございます。」

「お早う。」

といふ言葉を交すのみで過ぎた。

ところが或る時向うから桃色のスカートを穿いてゐる女が一人來るのが目にとまつた。いつもあの娘が來る時分だと思つて見ると、果して其の娘であつた。大概白いワンピースを著てゐたが、そろ〳〵と朝寒を感ずる時分になつたから、衣を更へて來たのであらうかと思ふうちに近づいて來て、やはり、

「お早うございます。」

「お早う。」

と云つて過ぎ去つた。

其の翌日であつたが、今度は水色のワンピースを著て來るのであつた。此の間の桃色のスカートは特別の服であつたのであらうと思はれた。それから續いて水色のワンピース姿に出會ふのであつた。

或る日ふと私は杖をとめて、

「どこかへお勤めですか。」

と聞いて見た。娘は行き過ぎようとした足をとめて、

「學校です。」

と答へた。私は、

「大變早いのですね。どこの學校？」

と聞いた。娘は顔を横に向けて、お下げの髪が前に來てゐるのを口に啣へて云ひ淀んでゐる樣子であつた。私は强ひて聞くでもなく、

「行つてらつしやい。」

と云つてそのまゝ歩き出した。娘は私に一寸遲れて歩き出した樣子であつた。

有明の月といふと、いつも紙で描いたやうな光りの無いものを見るのであつたが、今日の有明月は磨ぎ澄ました鏡のやうな光を持つてゐた。海岸に出る前に見ると、稻村ヶ崎の上を三四間離れたところの空に其の明鏡はかかつてゐた。折節滿ち潮であらうと思はれる由比ヶ濱の波は、沖の方から高く崩れて近く押し寄せて來てゐた。其の時であつた。あの娘は又海の方から現れてこなたへ近づいて來た。さうして、

「お早うございます。」

と云つた。私も、

「お早う。」

と答へた。

（昭和二四年）

小諸百句

序

昭和十九年九月四日鎌倉より小諸の野岸といふところに移り住み昭和二十一年十月の今日まで尙ほ續きをれり。鎌倉の天地戀しきこともあれど小諸亦去り難き情もあり。二年間此地にて詠みたる句百を集めたり。

昭和二十一年秋　小諸山廬　高濱虛子

何をもて人日の客もてなさん
鶏にやる田芹摘みにと來し我ぞ
煎豆をお手の窪して梅の花
紅梅や旅人我になつかしく
薪を割る人に殘雪遠くあり
四方の戸のがた〳〵鳴りて雪解風
雛の家の門邊の雪の掃かれあり
紙折つて雛のあられを其上に
蓼科に春の雲今動きをり
物種をくれて腰かけ話し込み
春雷や傘を借りたる野路の家
玻璃内の眼を感じつゝ親雀
初蝶來何色と問はれ黄と答ふ
初蝶が來ぬ炬燵より首を曲げ
初蝶の其後の蝶今日は見し
うるほへる天神地祇や春の雨
懐古園落花の蓐踏みて訪ふ
ものかげの黒くうるほふ春の土
山國の蝶を荒しと思はずや
やゝ赤く染めたりや此の櫻餅
桃咲くや足投げ出して針仕事
各々に注ぎて殘りぬ菖蒲酒
麥の出來惡しと鳴くや行々子
水車場へ小走りに用よし雀
早苗餐やいつもの主婦の姉かぶり
蝙蝠に悲しき母の子守歌
誘はれて祭の客となりにけり
世話といふ言葉が嬉し胡瓜もみ
山と藪相迫りつゝ螢狩
木の形變りし闇や螢狩
螢火の鞠の如しやはね上り
螢見や聲かけ過ぐる澤の家
二度の螢見に行く澤の家
見事なる生椎茸に岩魚添へ
夏草に延びてからまる牛の舌
熱き茶をふくみつゝ暑に堪へてをり
淺間嶺の一つ雷訃を報ず
虹立ちて忽ち君のある如し
虹消えて忽ち君の無き如し
虹を見て思ひ〳〵に美しく
人の世も斯く美しと虹の立つ
虹消えて音樂は尚續きをり
虹消えて小説は尚續きをり
俳諧の火は涼しとも暑しとも
ラヂオよく聞こえ北佐久秋の晴
秋晴の淺間仰ぎて主客あり
諸君率て小諸町出て秋の晴
案内の宿に長居や菌狩
停車場に夜寒の子守旅の我
垣の豆赤さ走りぬいざ摘まん
道草にゆふべの露の落しもの
稲妻にぴしり〳〵と打たれしと
顔撫でゝ冷たき鼻をあたゝめぬ
與良氏の墓木拱して紅葉せり
大根を干し甘藷を干しすぐ日かげ
大根を鷲づかみにし五六本
さかしまに樽置き上に冬菜置き
冬晴や立ちて八ヶ岳を見淺間を見
木枯に淺間の煙吹き散るか
多枯のこの道好きで今もとる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com